2022年12月4日（日）主日朝礼拝説教

『ザカリアの沈黙』　井上隆晶牧師
マラキ書3章19～24節、ルカ福音書1章8～20節

❶【人間の正しさは神の前では耐えられない】

今日は、祭司ザカリアと妻エリサベツのお話をしたいと思います。聖書を見ると「**二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。**」(6節) と書かれています。二人は義人であり、神の定めをすべて守る、非のうちどころがない模範的信者でした。しかしこの夫婦には子供ができませんでした。ユダヤでは子供ができないということは神の祝福から漏れていると思われていました。祭司ザカリアは香を炊く当番になり、聖所に入って香を炊いていると、大天使ガブリエルが現れ、香壇の右に立ちました。ザカリアはそれを見て、「**不安になり恐怖の念に襲われ**」（1：12）ました。神の戒めをすべて守る非の打ちどころの無い人なのにどうして不安になり恐れるのでしょうか。このことはザカリアの正しさは、人間の中では優れたものであったかもしれませんが、神の前では通用しないことを教えているのです。人間の正しさは神様の光に耐えられないのです。だから神や天使が人間の前に姿を現す時、「**恐れるな**」というのです。律法を守ることから来る正しさに平安はありません。人は自分の正しさを握りしめて神の前に立つと、必ず崩れます。神の前には、愛と信頼をもって立たないといけないのです。

❷【人は神の御心を行うために生まれてくる】

大天使ガブリエルは続けてこういいました。「**恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名づけなさい。…**」（13 節）。しかし、ザカリアは天使に答えました。「**何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。**」（18節）ザカリアもエリサベトも「子どもを与えて下さい」と長い間祈ってきたことでしょう。しかし願いはきかれず、やがて高齢になり、祈りは忘れられたと思います。しかしここにきて彼らの願いがきかれたのです。「**あなたの願いは聞き入れられた**」何という嬉しい響きでしょう。本来ならば大喜びするはずです。でもここには素直に喜べていないザカリアがいます。何かバタバタと戸惑い、神様のなさることを素直に「はい」と受け入れられない彼がいます。皆さんはどうでしょう。素直に喜べますか？若い時だったらまだしも、この歳で聞かれても、体力もないし、子育ては大変だし、と思いませんか。願いがかなって与えられた子（ヨハネ）は、やがてエリヤの霊と力をもつ神の預言者となり、救い主に先立って行き、準備のできた民を主のために用意する、という神の仕事をするようになります。そして捕らえられ、牢の中で斬首の刑を受ける

という過酷な運命が待っています。
私たちは簡単に神様に願い事をしますが、神に願う以上、神の御心に適った形で聞かれるのだということを忘れてはいけないと思います。人は、自分の楽しみの為に願うのではなく、神の御心がなることを願わなくてはいけないのだと思います。神の御心は時に、厳しいことがあります。人は神の計画を行うための道具として生まれてくるのだと思うのです。

●ニューヨーク大学のリハビリテーション研究所の壁に一人の患者の残した詩があります。「大きなことを成し遂げるために力を与えてほしいと神に求めたのに、謙遜さを学ぶようにと弱さを授かった。より偉大なことができるように健康を求めたのに、より良きことができるようにと病弱を与えられた。幸せになろうとして富を求めたのに、賢明であるようにと貧困を授かった。世の人々の賞賛を得ようとして成功を求めたのに、得意にならないようにと失敗を授かった。…　求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた。神の意にそわぬものであるにもかかわらず、心の中の言い表せないものは、すべて叶えられた。私はあらゆる人の中で、もっとも豊かに祝福されたのだ。」

神様のはからいを信じて、心を委ねましょう。求めていないものが与えられた時には謙虚にいただこうと思います。なぜそれが与えられたのかは、いつか分かる日が来るのです。

❸【時が来れば実現する神の救いの業】

大天使はザカリアに言います。「**わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝える為に遣わされたのである。あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。**」（19～20 節）「**喜ばしい知らせ**」は英語では「good news」です。つまり「福音」です。神の福音というのはいうのは時が来れば実現するものなのです。いくら信じられず、受け入れられなくても、神の福音はザカリアの上に行われていきました。私たちも同じです。私たちが信じられず、よく分からなくても、神様の救いの業は時が来たら必ず実現するでしょう。神様がザカリアのような高齢者をあえてお用いになるのも、エリサベツのような不妊の女性をあえてお用いになるのも、「**神の救いの業が人の力や行いによらず、神ご自身によって進められるため**」なのです。救いは人間の中から出て来るものではなくて、人間の外からやってくるからです。あなたの周りがいくら真っ暗闇のような状態であっても、目が覚めたら突然、光に変わっていたということがあるということなのです。明日、神様が何かを起こしてくださるかもしれないという希望があるのです。

❹【ザカリアの沈黙】

ザカリアは子どもが生まれるまで約９か月間の間、口が利けなくなりました。そ

の「**沈黙の生活**」の中で彼が学んだことは何だったのでしょう。「神のために話すことは良いことです。神のために黙っているのも善なのです。」という言葉を聞いたことがあります。イエス様はお話になる前に、三十年間も黙っておられました。そして私たちにお話になったときは短いお話しかしませんでした。詩編の 131：2 に「**わたしは魂を沈黙させます。私の魂を幼子のように。母の胸にいる幼子のようにします。**」という言葉があります。魂を沈黙させるってどういうことでしょうか。

●青山学院大学宗教主任の塩谷直也先生がこんなことを書いています。
「高速道路を運転する。速度が増せば増すほど、視野は狭まってゆく。いつもは自転車で通る道を、たまには歩いてみる。思いがけないお店を発見し、美しい木々の緑に思わず立ち止まる。ゆっくりすればするほど、実は視野は広がる。とりわけ今は立ち止まったわけだから、360°見回せるはず。今は、その景色を十二分に楽しむ時じゃあないかな。母の胸にいる幼子のように力を抜いてみる。大切な落とし物を拾う時、人は立ち止まるのだから。見落としてはいけないものを注視するとき、人はたたずむのだから。」

ザカリヤも神（母）の胸に抱かれた幼子のようになって肩の力を抜き、神様がしてくださるすばらしい恵みの数々をよく見るようにされたのだと思います。だからこそ聖霊に満たされて預言をし、「ザカリアの賛歌」（ルカ 1：67～）が出て来たのです。そういえばサウロもパウロにされる時、目を見えなくさせられ、その歩みを止められることによって、もっとはっきり神の業が見えるようになりました。「ゆっくりすればするほど、実は視野は広がる」のです。それが神の与える魂の沈黙なのです。詩編 131 の続きは「**イスラエルよ、主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。**」で終わっています。このアドヴェントの時、立ち止まって魂を沈黙させ、神様がされる業を見ようではありませんか。